

十二月四日 スーチャン第十一収容所第二

分所に入る。

昭和二十一年六月一日 スーチャン二十四、二十五番

炭坑にて、採炭並びに坑道掘削

作業に従事する。

昭和二十三年六月二十八日 炭坑作業終了の通告を受

ける。

六月三十日 スーチャン収容所を出発す

る。

七月十三日 ナホトカ港にて大郁丸に乗

船、出港。

七月十七日 舞鶴上陸、復員。

本籍地 和歌山県新宮市新宮五六四五番地

終戦時の職名 飛行兵（機関工手）

最も長く居た収容所名 スーチャン市第十一収容所第

二分所

（広島県 山田 浩造）

シベリア強制抑留体験記

広島県 榎上 竹士

生地獄の抑留体験に激しい怒りを持ち続けながら、この事実を永く、正しく後世に伝えるべくペンを執る。私は、ソ連は大国であると小学校の先生から聞かされていた。終戦後、スターリンの命令により、ポツダム宣言、日ソ不可侵条約を踏みにじって旧満州から日本軍人、邦人等六十万人余を拉致、しかも満州から日本で日本に帰すと大嘘を言い、着いたソ連のそれぞれの地で苛酷な強制の労働、加えて零下三十度〜四十度という極寒の中、薄い外套、極くわずかな食糧の上にノルマ、ノルマの罵声、さらに栄養失調の我々日本人をたおれるまでだまし続けて使い、そのため数万人が死すという、言語に絶した非人道的行為は絶対に私の頭から消えず、許すことは出来ない。今、多くの亡くなった方々の御冥福を心よりお祈りするものである。

昭和二十年八月二十日朝、鏡泊湖台地に師団部隊が整列、ソ連軍団主力部隊の到着を待つ。赤鹿兵団と現地停戦協定成立、師団長赤鹿中将は「本日、軍は全面停戦をなす。諸君はただ今ただちにソ連軍の指揮下に入るべし。余は先行する。では諸君、達者で、健康を祈る」と最後の訓示をされ、ソ連軍に連行された。ソ連軍が参戦して僅か十日にして戦わずして停戦、さらにソ連軍の指揮下で部隊解散の憂きめに遭う。我々は食糧、衣類等を持てるだけ持ち、出発準備を整え待機するも、営外居住将校の家族の準備に手間どり、鏡泊湖を出発したのは昼を相当過ぎたように思う。

準備の終わった順に、歩兵部隊、砲兵部隊、工兵隊出発、私達工兵小隊は、部隊の最後尾を行軍することとなった。行軍に慣れた歩兵部隊が先頭のために途中で隊列が乱れ先頭との距離が開き、ソ軍兵にせき立てられ度々駆け足で先頭に追い付き、随分と苦勞する。行き先も分からず、何処をどの方向に歩いているのかも皆目分からず、ただただ先頭に遅れまいと懸命に歩き続けた。

八月二十一日か二十二日か、確かな記憶はないが、日本軍の駐屯地に各地から集合して来た。営庭に整列し、身体、携帯品の検査があり、苦勞して持って来た食糧、衣類全部を押収され、着のみ着のままとなる。ソ連兵が一番欲しかったのは時計、万年筆だった。ここに来るまでに、ソ連兵にほとんど全員強奪された。当初、ソ連兵で時計を持っている者はほとんどいなかったが、しまいには一個や二個ではなく、四個も五個も腕にはめ、得意になっている者がいた。

次々と集結して来る部隊は、従来の編成を解き、千五百人を単位とする混成作業大隊に編成された。ここでの編成指揮はソ連軍の手でなされたが、その計算能力の低いには驚かされた。我々を五列縦隊に並ばせ、一列ずつ前に出させ、手の指を十本使ってしまうと、その五十人は別の場所に移動させ、混ざらないようにする。同じことを三十回繰り返し、漸く一個大隊の編成を終る。なんと時間のかかることおびただしい。私達は延吉から来た砲兵隊を主力にして千五百人の作業大隊が編成された。砲兵隊の多くは年配の召集兵の

人が多い。大隊長は石川少尉、延吉で既に一個大隊の作業隊をソ連側により編成されて来たとのことであった。私達も鏡泊湖を出発してからソ連側から何の説明もなく、ただ警護の兵隊に「ヴィストラ、ダワイ（急げ）」とせかされるばかりで、どこに行くのかさっぱり分からなかったが、作業隊が編成された今、帰国の希望は無残にも打ち砕かれた。

編成された千五百人の一団はさらに行進する。方向が北か南か、日にちもわからないまま行進する。鏡泊湖から無理して持って来た食糧、衣類を取り上げられ、身軽くなった。体力の劣る召集兵と一緒なので、これからの行軍は随分と楽になった。長い道のりを行軍して広い野原に用意された貨車に乗せられた。周囲は見渡す限りの広野で、民家、人影は我々以外全くない。列車は少し走ってはいつも民家が遠く離れた駅のない野原で長時間停車する。どれくらい走ったのだろうか、列車は民家の散在するアムール河岸に出た。川上にソ連軍の江上艦隊が停泊している。これを見てウラジオストクに着いたと皆小躍りして喜んだが、ハバロフ

スク郊外の港で、列車に乗ったのはソ連領に入ってきたらだと後で知った。

しばらくしてハバロフスク市街に入る。ソ連兵の警戒が厳しくなる。ハバロフスク駅に下車、郊外の収容所へ。玄関に日本人が作った大時計があり、多くの日本人が忙しく往来していた。市街の浴場で入浴し、衣類を消毒して健康診断を受けた。そこからさらに列車で北上、コムソモリスクに到着。コムソモリスクはハバロフスクからアムール河を下ること約三百キロであつて、発展途上の新興工業都市で、交通の一大要衝であつた。収容所は郊外の閑静な所にあつた。角材を積み重ねた二階建ての大きな倉庫を改造したもので、周囲には真新しい板壁を張り巡らし、四隅には望楼が立ち、自動小銃を腰にソ連兵が立哨警戒する。抑留生活が始まった当初は、満州から掠奪して来た鉄鋼、機械、石炭、主として工業資材を貨車からおろす危険な重労働であつた。貨車の回転を早くするため、夜中でも叩き起こされて「ヴィストラ、ダワイ」である。ひっきりなしに貨車が入って来るので作業時間が定まらず、睡

眠が不足し、その上、何よりも食糧が飯盒に半分の高梁粥が当たればよい方であったから、一同見る見るうちに栄養失調に陥った。先ず胃腸の弱い者が斃れ、次いで肺炎など呼吸器病で斃れていった。そのうち入浴ができないために虱が湧き、発疹チフスが猖獗を極め、高熱にうなされてぼっくりぼっくりと死んでいった。大隊千五百人のうち、二十一年一月中旬までに実に百六十余人が憤怒のうちに死亡したのである。

工業資材のおろし作業も一段落し、私達小隊は、若い現役兵ばかり四十人ぐらいでアムール河の土砂を貨車に積載する重作業に出された。朝、薄暗いうちに収容所を出てコムソモリスクの市街まで歩き、そこから軽便鉄道でアムール河岸まで行き、さらに作業場まで歩かされた。収容所から市街まで四キロぐらいの道を一人の警備で軍歌を歌いながら行進をさせる。市街近くになると子供や老人がどこからか集まって来て「ヤポンスキーマツオカ」「ヤポンスキーバンザイ」と叫ぶ。はじめは万歳と我々を歓迎するのかと思ったが、どうやら「日本軍は両手を挙げて降参した捕虜だ」と

あざけていているのだった。この時ぐらい敗戦の惨めさを痛切に感じ、情けなく腹立たしく思ったことはない。

警戒兵一人で道中別段せき立てるでもなく、総て日本人が指揮を執り、作業現場では人のよさそうな中老の監督が、片言のロシア語が出来る日本人と交渉して作業をさせる。土砂運搬用の貨車三台に河砂をいっぱい積み込む作業だが、日本の倍くらいある大きなスコップでの慣れない作業は大変に辛かったが、午前一回、午後一回、計二回だけ貨車が入ってくるので実働時間が短く、収容所から作業場までの往復時間が長く休憩時間も多く、結構楽しい思いをした。

冬になり屋外作業が出来なくなつてからは市街の屋内作業をした。その頃、所内の医療施設も整い、入ソ以来初めて健康診断が実施された。軍医の診断はなかったが日本の衛生兵が体温を計り、三十八度以上の発熱者は作業免除、所内休養、重症者には所内の医務病棟で療養診断がなされた。私は衛生下士官の取り計らいで四十度の高熱ということで医務病棟に入院した。二階の広間に設備された病室には真新しいシーツの掛かっ

たベッドが十台くらいあり、重症で動けない患者二人と入院した。食事は病人食白パンが給与された。そのほかマホルカ（煙草）も支給された。二カ月ぐらいで退院を申し出、作業隊に帰った。春になって今度はソ連軍医の健康診断があり、百人近い者が栄養失調と診断され、労働不適合で他の収容所に移されることとなった。

私もそのうちの一人だったが、石川大隊長から「病人は他の所に移されて殺されるかもしれない。君の代わりに○○を出したので君は当分○○を名乗りここに残れ」と言われ、残ることになった。夏にその人達は他の収容所に移送され、その後の消息は不明であった。帰国して後で解ったことであるが、その人達は二十一年十二月八日帰国第一陣で、大久丸・恵山丸の二隻で合わせて五千人が舞鶴港に上陸、帰国していた。その頃には抑留生活にも多少慣れ、所内もようやく整備されて、散髪、入浴場も設備され、所内で出来るようになった。朝夕の食事も食券で食堂でするようになった。そして民主化運動がポツポツ芽生えて、将校批判を起こさせ、作業隊から将校を追放し、新しく隊

長と幹部を選出させた。作業から疲れて帰り、二階の薄暗い裸電球の下でハバロフスクから派遣されたオルグの真（新）民主主義の講義を聞くのは作業以上に辛かったが、そうしないと帰国が遅れると言うので皆仕方なく出席した。

年が明けて、私達健康のすぐれない者百人ぐらいで作業隊を編成して、行き先も知らされずに突然に移動が始まった。シベリアの冬は寒く、そのものがまるで牢獄で、明けても暮れても灰色の空からチラチラと粉雪が舞い、その寒さは「寒いというよりも刃物で切られるような痛さ」である。老年で病弱の多い一行の徒歩移動は容易でなく、その苦労は並大抵ではなかった。途中物凄く寒い寒波に襲われて、凍傷にかかり歩行困難となり凍死する者が続出し、止むなく河岸の漁獲倉庫で雪嵐を避けることにした。大きなバラック建ての倉庫には暖房設備等勿論なく、寝具も何一つない。ドラム缶のストーブを出入り口に一つ備えたが全く暖房効果はなく、昼間は運動して身体を動かし何とか寒さを凌ぐことができたが、夜は外套に身体を包みブルブル震

えながら、小便に十数回も往復、全然眠ることが出来なかった。高齢者の多くが斃れ、多い時には一日三人も四人もが死んだ。死者は裸にしてトラックに積み、アムール河に運び捨てたと聞いている。一行の半数が中年の召集兵であったが、それは重労働と寒さと飢えにさいなまれ、栄養失調で尽きぬ恨みを残して死んでいったのである。誠に気の毒であるが、どうすることも出来なかった。

どれくらいそこで過ごしたか記憶にないが、寒波も過ぎて幾分暖かくなって、見渡す限り灌木の生い茂る野原をアムール河下流に進み、広いコルホーズ（農場）に到着。農場には数人のロシア婦人が働いていた。私達の姿を見て皆仕事の手を休め、口々に「ハラショー、ヤポンスキーハラショー」と歓迎してくれた。農場中央の野菜貯蔵庫に枯れ草を敷き、宿舍として用意された。就寝して夜中にかゆいというより痛いので見ると、五ミリはある大きなダニが身体中とところ構わず食い込み血を吸うのには閉口した。特に股間の柔らかいところに身体半分食い込み、血を吸って赤く染まった尻尾

を覗かせているのに驚き、指でつまみ取ると尻尾だけが取れて頭が残った。先の尖った物で掘り出さないと取り出せないのだ。

翌日から農作業を始めた。農業の経験のある者は野菜貯蔵庫の前の苗床に野菜の種を播種して苗を育てた。他の者は馬鈴薯の植え付け作業をする畠に三十センチぐらいの間隔で穴を掘り、トラックで運ばれて来る種芋を播くのであるが、ノルマは種芋の量によって今日からはトラック何台分と決められる。初めは一つ穴に二切れから三切れを植えていたが、それではノルマが達成されないので、ソ連人の目をかすめ大きな穴を掘り、その中に十切れも二十切れも放り込んで素早く土を覆ってなんとかノルマを達成した。シベリアの野菜（馬鈴薯）の成長は早く、間もなくして収穫の時期が来る。収穫の作業ノルマはこんどは畠の面積で決める。両足間に茎を挟み、茎だけ引き抜き誤魔化してノルマを達成する。ソ連は収穫作業を抑留者の健康回復の一つの手段と考えていたようで、収穫物を宿舍に持ち帰ることは固く禁じていたが、作業現場で煮て食べるのは何

も言わないので、皆飯盒持参で作業して、見る見るうちに健康回復し元気になった。その反面、ソ連の基本姿勢は、明らかに労働に役立たない者は抑留しても意味がないということから、私達米養失調の者を雪嵐の中を移動させれば死亡者が出ることは明らかであることを十分承知の上でそうしたのではなからうか。このことは私の深い心の中に秘めたことで、想い出すのも嫌で、思うと今でもゾッとするのである。

二十二年四月には帰国が再開されたが、私達は知らなかった。六月終わりにはシベリアの広い野山にタンポポ、ツツジの花が一斉に咲き、厚い氷に閉ざされたアムール河の氷が大きな音と共に割れ、流れ始める。そうしたある日、何の前ぶれもなく突然ソ連兵がやって来て「ヤポンスキー・トウキョウダモイ、ダワイダワイ・ヴィストラ・ダワイ」とせき立てる。支度もそこそこにコルホーズを出発した。

その頃シベリア各地の収容所では民主化運動が盛んに行われていた。私は幸いなことに民主化運動の芽生えた頃はコルホーズに出たので民主化運動がどんなも

のか全く知らない。途中、写真、メモ等野原に捨て身辺の整理をした。コムソモリスクで列車に乗り東に進む。車中でわか仕立ての民主化教育が実施され、反動分子、天皇島に敵前上陸、吊るし上げ、ソ同盟に感謝とか、聞き慣れない言葉を耳にするが、オルグの言っていることは全然理解出来なかった。しかし、反動分子は帰国させない、民主化された者から優先帰国させるといっているので、解ったように装って聞いていた。

七月中旬ナホトカに着く。港の丘に奥から第一、二、三収容所が並び、順次進んで乗船するらしく、第二収容所から第一収容所に返されたり、折角第三収容所まで行き、反動的な行動でシベリアに逆戻りされることもあるので、十分注意して行動するようにとのことであつた。

私達コルホーズ組は順調に進んで七月二十四日朝、引揚船第一大拓丸に乗船、ナホトカ港を出航し七月二十八日舞鶴港に入港。船内で検疫を済ませ、いよいよ上陸である。埠頭には多くの人々が日の丸の旗を振り「ご苦労様でした」と歓迎してくれた。四年三カ月ぶ

り、懐かしい祖国日本の土をしつかりと踏みしめることが出来たのである。

私は戦後五十年過ぎて今なお心残りなのは、終戦も近い八月十三日、ソ連軍戦車が牡丹江掖河を攻撃してきたので、東京城の軍官舎の焼却の命令を受け、焼却警戒中に、燃え落ちる官舎の横を国境の開拓団から避難して来たのであろう、後脚を一本切断された裸馬に僅かばかりの荷物を負わせた老夫婦が足を引きずりながら南下して行った。おそらく避難の途中で仲間とはぐれ二人だけの逃避行であつたろうが、その悲惨な姿は、見るに堪えなかつた。着のみのまままで、頼る者もなく不眠不休で歩き続けて疲労困憊し、お互い口もきかず追われるように通り過ぎた。あまりにも哀れな姿に慰めの言葉もなくどうすることも出来ない。後を追って倉庫の砂糖を持って行かないかと声を掛けたが、無言でにらみつけて去って行った。多くの開拓団がいたが、国境守備隊は二十年四月南下、山に陣地を構築をした。日ソ開戦直前の関東軍には居留民を守ることが出来なかつたのだろうか。国境には多くの開拓団が

存在していた。若い男子は軍隊に動員され、残る老人、女子、子供の多くが家や財産を失つたのである。ほんとうの意味の敗戦の悲惨さをなめつくしたのは居留民（開拓団）の人々であることを決して忘れてはならないと思う。

毎年夏ともなると、広島、長崎では盛大な原爆慰霊祭が行われる。各新聞ともそろって原爆の特集記事を掲載する。原爆被害者である日本国民が被爆者の霊をとむらい、原爆の悲惨さを思いおこし、これを内外に訴えることは、もとより私も国民の一人として心から賛成である。しかし広島、長崎で死亡した人と少なくとも同じくらい、否これ以上の数の日本人がシベリアの荒野に斃れており、満州などを合めればかなりの数に達するのである。しかも前者は戦争中の出来事であるのに対し、後者は国のために日本が降伏した後の残酷なる事件の結果である。原爆被爆者の霊を丁重にとむらうことが国民の義務であるなら、われわれはいまだシベリアに眠る数万人の御霊に対して遙かにその冥福を祈らねばならないと思う。

合掌

【執筆者の紹介】

住所 広島県佐伯郡大野町丸石二一三一七

部隊名は旧満州虎頭第四国境守備隊 第三四七部隊

編成により、新部隊は第二百二十二師団工兵隊（部隊名は忘却）

帰国 昭和二十二年七月二十八日ナホトカ引揚船第一大拓丸にて舞鶴港上陸。

（広島県 山田 浩造）

シベリア抑留の記

広島県 稲村 香

一、経歴

昭和十七年十二月十日、現役兵として第三十九師団（藤部隊）師団通信隊要員で西部第二部隊（広島）に入隊。

十二月十七日夜半、広島東練兵場を出発、下関―釜山―奉天―天津―南京から揚子江を上り、漢口より行軍で中支最前線の湖北省当陽藤部隊師団通信隊に入

隊。

昭和二十年三月襄樊作戦をもって百三十二師団（新輝部隊）と交代、藤部隊は本土防衛軍として濟州島に転進する命を受け五月初旬当陽を出発、八月初め満州奉天に到着したが、時既に遅く、新京防衛軍として満州に留まることになり終戦を迎えた。

二、強制連行

終戦後武装解除、四平街市楊木林の元戦車学校に集結、十月初旬「ヤボンスキー東京ダモイ」の言葉に半信半疑、貨車に乗せられ黒河からブラゴエシチュエンスクに渡河、真夜中に汽車に乗せられた。

行き先は定かでないがシベリア鉄道を中継して内地に帰れるのではとの思いも残っていたが、月の光で大河の流れ、月の沈む方向などで判断するに、どうも西方へ進んでいるようで、戦友たちの口数も少なくなつた。

長いシベリアの一夜は一睡もせず、後方の空が白んで、帰れる夢は完全に消え去った。白樺の林が行けども行けども続くシベリアの広野に沈む夕陽、そっと